

今週の為替相場見通し(2022年10月31日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		145.11 ~ 149.70	147.44	145.50 ~ 150.00
ユーロ	(ドル)		0.9807 ~ 1.0093	0.9968	0.9700 ~ 1.0200
(1ユーロ=)	(円)		143.85 ~ 147.71	146.88	143.50 ~ 150.50
英ポンド	(ドル)		1.1259 ~ 1.1645	1.1615	1.1400 ~ 1.1700
(1英ポンド=)	(円)	*	165.57 ~ 171.38	171.37	169.50 ~ 173.00
豪ドル	(ドル)		0.6273 ~ 0.6522	0.6412	0.6170 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	92.99 ~ 95.45	94.58	92.00 ~ 96.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 松本 悠馬

(1)今週の予想レンジ: 145.50 ~ 150.00 円

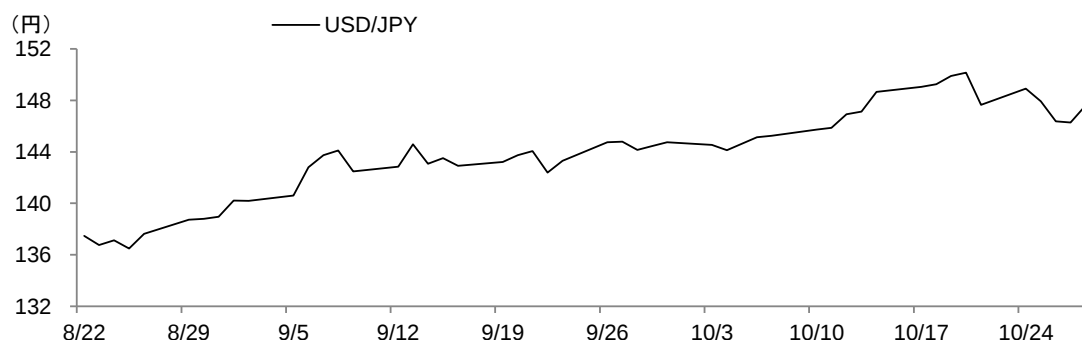
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週初に乱高下し値動きの荒い展開となった。週初24日、147.70円でオープンしたドル/円はシドニー時間に週高値の149.70円をつけた後、日銀による為替介入と思しき動きに145円台前半まで急落。その後ドル/円は急速に値を戻し値動きの荒い局面を見せた。海外時間では米10月製造業PMIの不冴えな結果にドル売りが加速も上昇基調は継続、149円を挟んでの揉み合いとなった。25日、149円手前での小動きだったドル/円は米10月コンファレンスボード消費者信頼感の市場予想を下回る結果にドル売りが加速し、147円台半ばまで値を下げた。終盤にかけては147円台後半まで水準を戻す結果となった。26日、ドル/円はシドニー時間に一時148円台半ばまで上伸。海外時間ではカナダ中銀の利上げ幅縮小と米金利も低下が材料視され、ドル/円は146円台前半まで下落。27日、ドル/円は米国利上げペースが減速するとの見方が広がり、一時週安値の145.11円まで値を崩すも、海外時間では米7~9月期GDPの良好な結果を受け一時146円台後半まで反発した。28日、日銀の金融政策決定会合は市場予想通り政策維持となった。ドル/円は日銀金融政策決定会合後には上下する場面もみられたものの146円台で推移した。海外時間では会合後の黒田日銀総裁の会見で緩和継続姿勢が改めて確認されると円売りが加速し147円台後半まで上伸。その後はまちまちな経済指標を消化し、147円台半ばで推移すると147.44円で越週した。

今週のドル/円相場は当局の為替介入を警戒しつつ底堅く推移すると予想する。今週はFOMCを控えている。市場ではほぼ確実に+75bps利上げが織り込まれている為、サプライズな結果ではない限り影響は限定的となろう。ただ、パウエルFRB議長や他の要人発言で12月以降の利上げペースに関する言及があるかが焦点になると思われる。仮に利上げペースの鈍化について明確な言及があればドル/円は先週同様、米金利の低下とともに一時的に調整局面を予想する。しかし、先週同様140円台半ばでは相応に買い需要は強く底値は堅いだろう。先週金曜日に発表された日銀金融政策決定会合では日銀における従来の金融政策の運営は不変で、今週も日米の金融政策の違いに伴う日米金利差からドル/円は底堅く推移するも150円台では為替介入の警戒感も強い為、じり高を基本線としたい。重要指標は1日(火)に米10月製造業PMI(確報)、米10月ISM製造業景況指数、2日(水)FOMC、パウエルFRB議長会見、3日(木)は米9月貿易収支、米10月ISM非製造業景況指数、4日(金)は米10月雇用統計等の発表を控えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/24~10/28)の値動き: 安値 145.11 円 高値 149.70 円 終値 147.44 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1) 今週の予想レンジ: 0.9700 ~ 1.0200 143.50 ~ 150.50 円

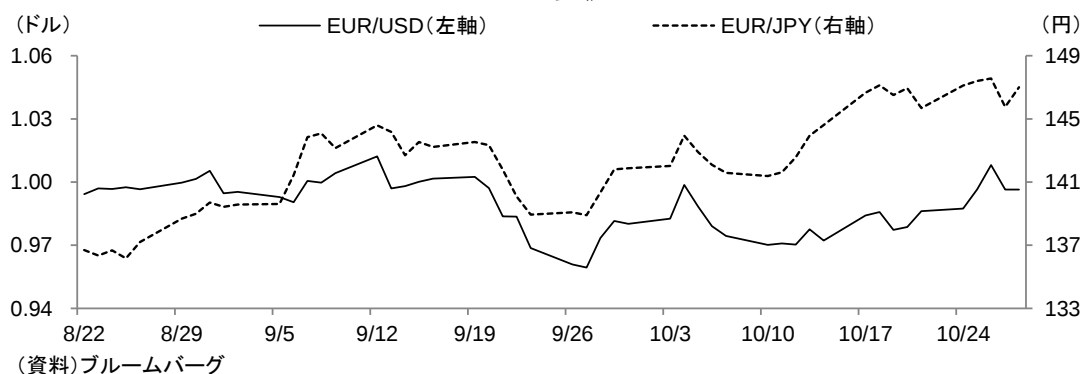
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて上昇、堅調推移した。週初24日、0.9860付近でオープンしたユーロ/ドルはシドニー時間に上値を伸ばすも、米金利上昇に伴うドル買いやユーロ圏10月製造業PMIの冴えない結果が重しとなり週安値の0.9807まで下落。その後は複数の米経済指標が市場予想を下回ったことでドル売りが強まり、0.98台後半まで値を戻した。25日、ユーロ/ドルは欧州時間に下げ幅を広げるも、独10月IFO景況指数の良好な結果や欧州株の堅調推移を受けユーロ買いが加速し0.99台後半まで上昇、その後も底堅く推移した。26日、0.99台半ばで揉み合い推移していたユーロ/ドルは、欧州株の堅調推移や米金利低下に伴うドル売りにサポートされてパリティ(1ユーロ=1ドル)を回復。その後も1.00台後半まで急伸し、約1か月半ぶりの高値圏での値動きとなった。27日、ユーロ/ドルは週高値の1.0093をつけた。その後はECBの利上げ決定にサポートされる時間もあったが、米7~9月期GDPの良好な結果にドル買いが強まり、0.99台半ばまで下落した。週末28日、0.99台半ばでスタートし、一時0.9998まで上昇する場面もあったが、パリティレベル回復には至らず。その後、米金利上昇が重しとなり、ユーロ/ドルは一時0.9928まで反落。その後も0.99台半ばで揉み合い推移となり結局、0.9968で越週した。

今週のユーロ相場は上値重い展開を予想する。米経済指標の軟調な結果を受けて、FRBによる利上げペースが減速するとの思惑から、先週のユーロ/ドルは週半ばにかけてユーロ買いの展開となり、9月20日以来のパリティ回復となり、一時1.0093まで上昇する場面が見られた。その後、10月27日に開催されたECB政策理事会では予想通り+75bpの利上げが実施されたものの、来年にかけて域内経済の景気減速懸念により、週後半にかけて再びユーロ売りの展開となり、再びパリティ割れの展開となった。今週は11月1日~2日の日程でFOMCの開催が予定されており、従来のタカ派トーンからはいくらか分ハト派な見解が示される可能性があるものの、ユーロ圏の景気低迷や、引き続きウクライナ情勢による地政学リスク、エネルギー不足問題などが積極的なユーロ買いへの重しとして想定され、ユーロ/ドルは伸び悩みの展開となろう。今週の重要指標の発表は10月31日(月)ユーロ圏10月CPI、ユーロ圏7~9月期GDP、11月2日(水)ユーロ圏10月製造業PMI、3日(木)ユーロ圏9月失業率、4日(金)ユーロ圏10月サービス業PMI、ユーロ圏9月PPIなどの発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/24~10/28)の値動き: (対ドル) 安値 0.9807 高値 1.0093 終値 0.9968
(対円) 安値 143.85 高値 147.71 終値 146.88



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.1400 ~ 1.1700 169.50 ~ 173.00 円

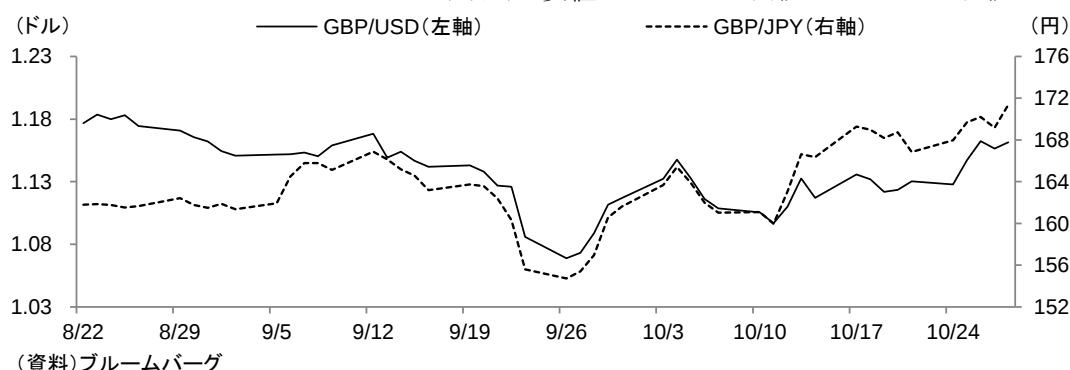
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、予想に反し、ほぼ一貫した堅調推移を続けた。この間、英経済指標などに目ぼしい発表はなく、ポンド堅調には、主に、ドル軟調の裏返しと、英政治の展開を好感した調整的な反発というふたつの要素が貢献した。ドル軟調は、米連銀追加利上げ観測がすっかり伸び切った(利上げ織り込みが大幅に進んだ)環境で、米紙観測報道(24日)などを受けた利上げ打ち止め期待の広がりが重石になった。また、公式に確認はされないものの、財務省/日銀が断続的に円買い為替介入を実施した模様で、その度にドルが対円で下押ししたこともドル全般の上値を押さえた。注目された英与党保守党の党首選は、週明け24日までに、必要な保守党国会議員100人の支持を唯一集めたスナク元財務相の当選がほぼ確定、ジョンソン元首相再登板の可能性を嫌気して下押ししていた英国債の反発と並行して、ポンドは堅調な滑り出しを見せた。現地時間同日午後までに同元財務相の当選が確定、翌25日には新首相に就任した。スナク新首相が、就任に前後して、ハント財務相の続投を決めたことも英国債、ポンドは好感した模様。逆に、26日、財政計画の発表が11月17日まで延期された(10月31日から)ことは一時的な英国債の下押しを招いたものの、ポンドはほとんど材料視しなかった。27日、欧州中銀理事会は、市場の概ねが予想した通り各種政策指標金利を75bp引き上げたものの、同決定発表後の記者会見でラガルド総裁がユーロ圏景気の下振れリスクが大きいとの認識を示したことで、ユーロは全面安に振れた。ポンドも、対ドル対円などではユーロに連れ安したが、対ユーロでは明確に水準を切り上げた。

今週の英ポンド相場は、対ドルの1.17前後の水準に上値を押さえられた横ばいを中心に予想。ただし、1日(火)の英中銀による短期国債売却(量的引き締め第一弾)を受けた英国債市場の反応や、3日(木)の英中銀金融政策委員会の決定、及び、その議事録の内容などによっては、相場が大きく上振れ/下振れする展開も考えられる。スナク新政権の発足を金融市場は歓迎している模様で、現在までに、英国債とポンドは、9月23日の補正予算発表後の下落分を完全に払しょくしている。並行して、一時は100%以上織り込まれた同委員会における+75bp利上げ見通しも、現在までに大きく後退しており、英金利市場の織り込みは+50bpと+75bpの確率が半々ぐらいという水準まで低下している。財政健全化に対する期待感と物価上振れリスクの後退を反映した値動きということであろう。この間の英国債とポンドの下落の起点を、補正予算発表に置るか、トラス前内閣が発足した9月上旬に置るか、もしくはトラス候補(当時)の優位が伝えられた8月半ばに置るかで、「戻り高値」の目途も変わるが、上述水準感は、トラス内閣誕生を起点としたもの。そこに論理的な根拠は乏しく、多分に感覚的なものでしかない。ただ、もうひとつ、ポンド上値の重さを見込む大きな理由は、財政健全化に舵は切ったものの、今般の騒動を経て、英年金などは既に相当な損失を計上しているはずだし、一度失われた財政規律に対する信頼を取り戻すのは容易でないと考えるからだ。つまり、これ以上のポンド続騰には、失策の是正だけでは不十分で、ポンド資産を押し上げるための、何かしら積極的な買い材料の出現が必要ということだ。そうした目線で、英中銀金融政策委員会の決定がポンドに与える影響は、①+75bpと強気の英景気見通し ②+75bpと弱気な英景気見通し ③+50bpと強気の英景気見通し ④+50bpと弱気な英景気見通しの順で押し上げ→押し下げ要因になるのではなかろうか。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/24~10/28)の値動き: (対ドル) 安値 1.1259 高値 1.1645 終値 1.1615
(対円) 安値 165.57 高値 171.38 終値 171.37



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6170 ~ 0.6600 92.00 ~ 96.00 円

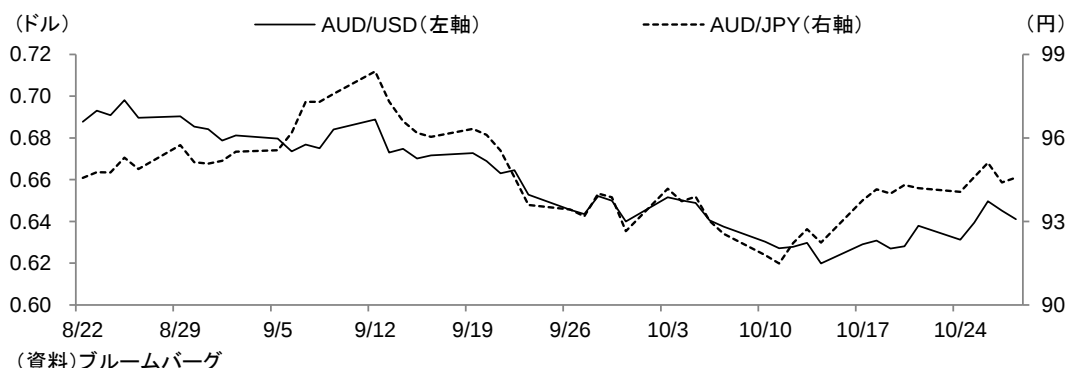
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.63半ばでスタート後、0.6270近辺まで下落し、週央にかけては0.6520近辺まで上昇したが、0.64近辺で越週した。月曜はRBAセント総裁補佐が講演で「豪ドル安による輸入インフレのリスクを懸念していない」と語った他、「タイトな労働市場の中で、より持続可能な需給バランスを確立する必要があると考えれば」、更なる利上げが行われる公算が大きいとの認識を示すと豪ドルは下落に転じた。この他、前週から延期された中国指標が発表され中国のGDP年間目標達成が絶望的と意識された事も豪ドルの重しとなった。加えて中国共産党大会後、権力集中の政治体制への警戒感から中国・香港株が大きく売られた事も豪ドル売りを誘った。火曜は米8月住宅価格指数は住宅ローン金利上昇を背景に過去最低の減速を示唆し、米10月消費者信頼感も予想を下回ったことでドル売りの流れとなった。発表された豪予算案は歳出抑制が重視され、来年6月までの財政赤字は369億豪ドルで対GDP比1.5%と予想された。4月時点では779億豪ドルと見込まれていた。但し歳出抑制に注力しても、足元の金利上昇に伴い、政府の借入れコストが急上昇しており、今後10年間利払い費が年間14%増加すると見込まれている。水曜は豪7~9月期CPIではインフレ圧力加速が確認され、RBAによる利上げの正当性を裏付ける結果となり、豪金利が上昇すると豪ドルは0.64台へ乗せた。また、カナダ中銀が予想より小幅な利上げを発表した事を受け、FRBの利上げ軌道も意識され、米金利が下落。ドル売りに傾いた事で0.65台へ上昇した。豪7~9月期CPIの上昇は前期比で住宅部門10.5%、公共交通機関9.2%、食料品(アルコール除く)9.0%が大きく寄与した。木曜は再度0.65台乗せたものの堅調な米7~9月期GDP等の指標を背景としたドル買いの流れから0.6420近辺まで下落し、引けは0.64台半ば。金曜は日銀金融政策会合後の発表では特段動く要素はなかったもののアルゴリズムによる機械の円買いが散見され、クロス/円の下落から豪ドルにその流れが波及し、その後も軟調に推移した。

今週はレンジ内での推移を予想する。31日(月)に豪9月小売売上高、1日(火)にRBA金融政策会合、コアロジック住宅価格、ロウRBA総裁講演、米10月ISM製造業景況指数、2日(水)は米10月ADP雇用統計、FOMC、3日(木)は豪9月貿易収支、4日(金)はRBA議事要旨、米10月付雇用統計の発表が予定。先週発表された豪7~9月期CPIではインフレ加速が確認された。これを受け、1日(火)のRBA会合では今後の豪利上げ軌道とターミナルレートの見直し修正の可能性に注目が集まる。今回の利上げ幅に関しては+50bp利上げも可能性としては完全に拭えないが、市場の大方は+25bpの利上げを予想している。ピークレートに関しては一部金融機関で概ねこれまでの予想より+50bp程度上方修正している。但し3日(木)のFOMCで+75bpの利上げも予想されており、豪州では非常にタイトな雇用環境、並びに個人消費やビジネス状況の好調と継続で更なる利上げを正当化せざるを得ない状態ではあるが、米当局は豪州以上の利上げ幅をもってインフレ退治を行う構えを見せている。よってこの両国の金利差は年末に向け拡大していくものとみられ、故に足許の豪ドルは米ドルへの資金流入継続で重く推移するとみる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/24~10/28)の値動き: (対ドル) 安値 0.6273 高値 0.6522 終値 0.6412
(対円) 安値 92.99 高値 95.45 終値 94.58



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。